

## 【論文】

# 家族の関わりが祖父母の老いの認知に与える影響

## —孫の視点から—

野中 響子 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会科学部)

### I. はじめに

Erikson (1986) は、「高齢者が孫と関わることは自己の生命が途絶えても、精神が次世代に引き継がれる信頼を形成し、そのことが死への不安を和らげる。多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、孫は『無限に未来に延びる自分自身の延長』となり気持ちの安定を取り戻す要因である」と述べている。よって、孫とのかかわりは、多くの高齢者にとって重要な意味を持つと考えられる。そのような孫と祖父母の関係について、西野・米村 (2019) は、平均寿命の延長、死亡率・出生率の低下から、現在の孫と祖父母の関係は、以前とは異なった特徴を持っていることを指摘している。孫と祖父母の生涯が重なる期間が拡張し、関係が長期化していることは、現在の多くの祖父母にとって「あたりまえ」の経験となっている。さらに、出生率の低下から、祖父母 1 人あたりの孫の数が減少している。これら 2 つの大きな特徴から、「相対的に少ない孫と、相対的に長期間成立する祖父母・孫関係」という構造変化が生じているといえる。このように、平均寿命が伸び続ける中、老いへの適応はもろすべての人に共通する重要な課題である。前述のような構造変化から、孫は祖父母の「老い」に接する機会が増え、またそれと向き合う期間も伸長していると予想できる。したがって、高齢者の心身の状況を家族が理解し、望ましい反応をすることは、高齢者との関係を円滑にし、高齢者の精神面や老いへの適応にもポジティブな影響をもたらすことが重要である。そこで、本研究では、孫が祖父母の「老い」を実感する事柄と、孫の祖父母の「老い」に対する認知や反応の仕方について検討する。

### II. 問題と目的

#### 1. 孫と祖父母の関係性についての研究

孫と祖父母の関係に関する尺度は、青年期の孫とその祖父母を対象とする、田畑ら (1996) が作成した孫-祖父母関係評価尺度が代表的なもののひとつである。この尺度には、祖父母が回答する「祖父母版」と孫が回答する「孫版」がある。まず、祖父母から見た孫の機能には、時間的展望促進機能、道具的、情動的援助機能、存在受容機能、世代継承性促進機能、日常的、情緒的援助機能の 5 つの機能が挙げられる。時間的展望促進機能は、「自分の余生を振り返らせる度合」とされ、祖父母が孫の姿から余生の大切さを感じたり、過去の自分を振り返ったりする程度である。道具的、情動的援助機能は、「孫とのふれあいの度合」で、孫が祖父母の用事に付き添ったり、現在の流行を教えたりすることなどが含まれる。存在受容機能は、「存在が心の拠り所となる度合」とされ、孫がいるだけで何もしなくても祖父母の心の拠り所になる程度である。世代継承性促進機能は、「世代が引き継がれていく安心感」であり、祖父母が孫の姿を通して、先祖からのつながりや自分の命が孫に引き継がれる実感を持つことに関連する。日常的、情緒的援助機能は、「日常の中での相互の関心の度合」とされ、

孫が祖父母に関心や理解を示す程度である。一方で、孫から見た祖父母の機能としては、存在受容機能、日常的、情緒的援助機能、時間的展望促進機能、世代継承性促進機能がある。

また、孫と祖父母の関わりの特徴についての研究がなされている。孫息子は父方祖父と、孫娘は母方祖母とより親密な関係にある（前原ら，2000）。また、男児よりも女兒、祖父とよりも祖母とのほうが多様な会話をする（村山，2009）。孫-祖父母関係評価尺度（田畑ら，1996）を用いた研究では、孫と祖父母の親密さが、存在受容機能と時間的展望促進機能に影響することが示唆されている（渡辺，2008）。また、祖父母との会話の多様性、接触回数、主観的親密感が孫の共感性に効果をもち、孫の共感性や主観的親密度の高さが直接的に祖父母に対する援助行動を動機づけることも示されている（村山，2009）。個人が持つ様々な役割の中で、祖父母の役割が自己概念の中心的な位置にある人ほど、また祖父母としてのアイデンティティがポジティブに形成されている人ほど孫との接触頻度が高い。さらに、祖父母アイデンティティの意味づけがポジティブであることは、祖父母役割を満足させるだけでなく、主観的 well-being の維持や増進に寄与している（中原，2011）。ここでいう「ポジティブ」とは、高齢者が祖父母としての自身を有能だ、うまくいっていると感じ、自信を持っていることなどを指す。一方で、女性の方が男性よりも、孫の現在・未来に関することが慢性型ストレス（6ヶ月以上継続しているストレス）になりやすい。また、年を重ねるほどそれがストレスになる割合が高くなる（村山ら，2018）。孫と祖父母の関係にはさまざまな機能があり、また両者の関係性によって互いの見方や接し方が異なってくることが報告されている。

## 2. 孫が祖父母の精神的な健康に与える影響についての研究

孫が祖父母の精神面にどのような影響をもたらすかについての研究も行なわれている。高齢者の主観的幸福感に唯一影響力をもった家族構成の変数は「孫」であった。「孫が家庭内にいる」ということが、高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼし、その理由として、孫の存在が高齢者の健康感や有用感を高めることが示されている（杉井・本村，1992）。また、内田ら（2015）は、「孫-祖父母関係評価尺度」（田畑ら，1996）を用いた研究を行い、祖父母の精神的健康度の高さには、時間的展望促進機能、道具的、情緒的援助機能が関係していることを指摘した。さらに、世代継承性促進機能が祖父母の精神的な健康状態や主観的健康感に関連するとの報告もある（橋本，2012）。孫が年齢を重ね、成人に近づくにつれ、孫の存在受容機能が高まることや、孫との主観的な「心の距離」が近いほど、高齢者は自らの余生や前途について考える機会が与えられることが示唆されている（橋本，2012）。このように、孫が高齢者の精神面に与える影響は、今後さらにさまざまな角度から検討する余地があると考えられる。

## 3. 「老い」に関する研究

「老い」に関する研究では、「老い」の認知と適応について検討されている（吉田・田中，2005）。そこでは、「老い」を自覚・認知する最初の段階は、些細な日常レベルの変化の蓄積であった。また、吉田・田中（2005）は、「生物心理社会モデル」をもとにした3次元において「老い」の認知のきっかけに関する検討も行っている。生理的次元では、身体の不調の慢性化が契機となって部分的な衰えを意識、部分的な衰えが蓄積して以前と比べてはっきりとした衰えを意識、寝たきりや自立性の喪失など著しい生理的な衰えを感じる最終段階という3つの段階があった。社会的次元では、定年退職、年金の受給、社会的活動性の喪失により「老い」を認知する。定年退職により、社会的役割の喪失が発生し、年金の受給により自動的に「高齢者」というカテゴリーを突きつけられるだという。ここで

いう社会的活動性の喪失とは、社会と接点を持たないこと、人と関わらないことなどが含まれる。心理的次元では、これから先への不安を持つ、衰えに合わせた調整をしたり無理をしないように心がける、「老人らしさ」の発現があった。「老人らしさ」の発現とは、硬さの発現や意欲の喪失など「老人特有」とみなされるパーソナリティの発現を指す。さらに、吉田・田中（2005）は、「老い」の喪失的な変化に適応する効果的な認知とされる、「老い」に対する受容的な認知の検討も行っている。それには、老いは誰にでも訪れるものだという「老い」の共通視、老いることは不可避で自然な変化だと考える「老い」の自然視、老いてきたとしても能力がゼロになったわけではないと考える「残存能力への注目」があった。さらに、「老い」への対処の検討も行っている。対処には、「老いとの共生志向」、「活動維持志向」、「改変志向」の3つが見出された。「老いとの共生志向」とは、自身の衰えを考慮しながら、無理をせずに今できる範囲のことをすることを示している。また、「活動維持志向」とは、衰えの自覚はしているものの、気にせずにやりたいことや好きなことを続けるというものである。この場合、心理的な衰えを否定的に捉えていることが多く、身体的な衰えに合わせて行動を制限するなどすると、心理的にも衰えてしまうと感じている。さらに、「改変志向」は、「年相応のあり方」の模索であり、衰えと共に自身の生き方を切り替えようとしていることを示している。「老い」への適応は、「老い」自体がストレスとなる「エイジング・ストレス」への対処となっていることがうかがえる。このように、高齢者は日常のさまざまなことから自身の「老い」を自覚し、意味づけをし、対応を試みていることがうかがえる。

一方、高齢者は、多い方から視力の低下、体力の低下、もの忘れ、記憶力の低下の順で、自らの加齢による変化を自覚していることが報告され、特に、もの忘れと記憶力の低下に対してマイナスの受け止め方をしてきた（渡邊ら，2000）。また、男性の方が女性よりも、年齢が上がるほど、健康問題が慢性型ストレスになる割合が高くなることから（村山ら，2018）、男女で老いへの捉え方が異なる可能性がある。しかし、老いの自己認知がポジティブな人ほど長生きするという知見もある（Levy et al., 2002）。このように、生きることへの意欲が部分的に老いの自己認知と寿命の関係を媒介しているということから、何が生きることへの意欲につながるのかを検討する意義があると考えられる。

#### 4. 「老い」に対する家族の評価についての研究

高齢者の「老い」とそれに対する家族の認知、高齢者の状態の両者の評価に関する研究も行なわれている。祖父母の心身機能について、祖父母による評価の方が孫による評価よりも有意に機能低下していることが示されている（石岡，2008b）。また、祖父母の心身機能に対する自己評価と家族評価を、祖父母、子、孫の三世代間で比較した研究もある。三世代間で有意差がみられなかったのは「日常会話」、「生活音」、「味覚」であった。一方、三世代間で有意な差がみられたのは「記憶力」と「学習」で、祖父母は自らの認知機能を低く評価する傾向がみられた。視力、視野、嗅覚、体力、指先の動き、記憶力、学習において、孫の評価は祖父母や子の評価よりも有意に高かった。孫と祖父母で有意な評価差があったのは、視力・嗅覚・体力・記憶力・学習で、孫は祖父母本人よりも機能は低下していないと評価していた（石岡，2008a）。

さらに、藤原ら（2003）は、易怒性、抑うつ傾向、幸福感、自己中心性、内向性などの精神的・心理的状态に比べ、転びやすさ、食べ物のつかえやすさ、会話の聞き取りにくさなど、第3者が観察しやすい身体的状態の評価の方が高齢者と家族の一致率が高いことを報告した。さらにこの傾向は、高齢者の認知機能レベルが低下するほど顕著になるのだという（藤原ら，2003）。高齢者と家族の一致率が最も高かったのは「食べ物のつかえやすさ」、最も低かったのは「易怒性」であった（岡本，2000）。

また、家族からのサポートは高齢者の心理的安定や加齢に対する肯定的態度を促進し、さらにこれらは人生の受容にも肯定的に作用することが示されている（柳澤ら，2002）。しかし、高齢者の「老い」を感じるきっかけや高齢者の状態に関する評価について高齢者自身と家族の間にずれが生じている可能性があることがわかる。家族からのサポートは、高齢者の精神的健康に重要な役割を果たすことが示唆されている。

## 5. 本研究の目的

これまで祖父母と孫の関係や関わり、祖父母の精神的な健康などと孫の関連についての検討が行われてきた。また、高齢者の「老い」の認知や家族による同居高齢者の老化への認知に関する研究もなされている。高齢者に良好でない身体的あるいは精神的・心理的状态が存在していたとしても、家族に認知・理解されることで、高齢者自身の精神的な安定につながり、健康の維持・向上に良い影響をもたらす可能性が示唆されている。しかしながら、祖父母の「老い」と孫をコミュニケーションの視点からみた研究は見当たらない。祖父母と孫の研究の大部分が世代間のきずなを探るものとなっているが、生涯を通じたコミュニケーションパターンを探るような研究が必要との指摘もある（安達，2006）。以上より、「老い」に対する受容的な認知の仕方が、「老い」によって生じるストレスを軽減し、幸福感や満足感につながることを示唆されている。さらに、祖父母自身の「老い」の認知やそれへの反応の仕方は、それ単独で成立しうるものではないと予想される。孫とのコミュニケーションを通して、祖父母自身の「老い」に対する認知や反応の仕方はどのように変化するかを検討することが必要である。そこで、本研究では、孫が祖父母の「老い」を実感することを通しての祖父母への関わりが、祖父母の「老い」に対する認知や反応の仕方に与える影響について検討することを目的とする。

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査対象者

同居、別居、死別を含め、祖父または祖母をもつ大学生・大学院生 217 名。うち、有効回答数は 205 名（男性 91 名、女性 113 名、どちらでもない 1 名、平均 19.46 歳、SD=1.46）であった。祖父、祖母両方と同居している場合は、より関わりのある方を選んで回答してもらった。祖父、祖母どちらかと同居している場合は、同居中の方について回答してもらった。祖父、祖母どちらも同居していない場合は、より関わりのある方を選んで回答してもらった。さらに、祖父、祖母を共に亡くしたという場合は、より関わりのある方を選んで回答してもらった。

### 2. 調査期間

2019 年 10 月・11 月

### 3. 質問紙の構成

以下の質問について自由記述で回答を依頼した。

質問 1:あなたがその方が「年をとったな」と感じるのはどんなときやことですか？

質問 2:その方の「老い(加齢こともなう変化)」について、あなたはもう思っていますか？

質問 3:その方の「老い」に対してどのような反応や関わり方をしていますか？

#### 4. 分析

KJ法を用いてカテゴリ分類を行った。

#### IV. 結果と考察

KJ法によるカテゴリ分類の結果を表1、表2、表3に示す。大カテゴリを《》、カテゴリを<>、内容を【】で示す。

##### (1) 孫が祖父母の「老い」を実感することについて

表1. 「年をとったな」と感じることについての分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	数
衰えてきた身体	容姿の変化(54)	体が小さくなった(13)／しわ(11)／腰が曲がった(10)／白髪(8)／昔の写真を見た時(5)／見た目(4)／しぐさ(1)／表情の変化の乏しさ(1)／歯が無くなっていく(1)	206
	足腰の衰え(47)	歩くのが遅くなった(11)／歩けなくなってきた(9)／外出が減った(6)／足腰の弱さ(6)／立つ・座るが大変そう(5)／歩き方(4)／行動範囲の縮小(3)／ひざの痛み(3)	
	傷んだ身体(39)	通院・入院(17)／病気(10)／体を痛める・壊す(5)／体調を崩す(4)／ケガ(3)	
	機能の低下(33)	耳が遠くなった(21)／体力・筋力の低下(6)／視力の低下(4)／発声の不具合(2)	
	脆弱性(21)	疲れやすい(10)／体調を崩しやすい(5)／不調から回復しにくい(3)／ケガをしやすい(3)	
	ぎこちなさ(12)	おぼつかなさ(7)／動作がゆっくり(4)／物事の順序が曖昧になる(1)	
今まで通りとはいかない	記憶力の低下(50)	もの忘れ(27)／同じことを言う・聞く(17)／名前を忘れる・間違える(6)	93
	習慣の変化(39)	出来ることの減少(11)／薬の服用(7)／しなくなったこと(6)／睡眠(4)／車の運転(4)／補助を要する(3)／食事の量の減少(2)／喫煙・飲酒を控える(2)	
	わかり合えなさ(4)	話が通じない(2)／ぼけ(2)	
心のエネルギーの低下	性格の変化(14)	性格が丸くなった(7)／頑固(3)／弱気(2)／怒りやすい(1)／愚痴が多くなった(1)	36
	語りの内容の変化(11)	死が近づく実感(4)／今後についての要望(4)／昔の話(3)	
	弱さの表出(7)	体の痛みの訴え(4)／体調不良の訴え(3)	
	関心の低下(4)	食への関心の低下(2)／外見への関心の低下(2)	

まず、表1の「年をとったな」と感じることに、1番数が多かった大カテゴリーは、「衰えてきた身体」で、孫は祖父母の身体的な衰えによって年をとったと感じることが多いことがわかる。中でも特に「容姿の変化」から老化を感じる人が多い。【しわ】や【白髪】が増える、【腰が曲がる】などの代表的な加齢による変化が記述されていた。また、【昔の写真を見た時】という回答もあり、これは孫という立場からの独自の視点であると考えられる。孫は子よりも祖父母と共に過ごす時間が短く、祖父母の若い頃の姿をあまり知らないといえる。孫は祖父母の若い頃の写真を見ることによって、年月の経過や祖父母の年を実感していると推察される。石岡(2008a)の報告では、家族は聴力の低下に気づきやすいとされているが、本研究においても「機能の低下」のカテゴリーで聴力低下が多く見受けられた。一方で、渡邊ら(2000)によると、家族は、多い方から体力の低下、動作がゆっくりになった、視力の低下の順で、高齢者の老化を感じていたと報告されているが、本研究の結果とは一致しなかった。

また、「今まで通りとはいかない」という大カテゴリーでは、孫は以前のように物事をこなすことが出来なくなってきた祖父母に「老い」を感じていることがわかる。「習慣の変化」のカテゴリーは、老化によって以前習慣にしていたことなどがどう変化したかについて示している。【出来ることの減少】には、作業を以前のように継続して出来なくなった、家事を以前と同程度出来なくなった、食べられないものができた、自転車に乗ることが出来なくなったなどが挙げられている。また、家族の約40～50%が、もの忘れや記憶力について低下したと思わないとされ、高齢者との間に意識の差が生じていたとの報告があるが(渡邊ら, 2000)、本研究の結果では【もの忘れ】や記憶力に関しては、【容姿の変化】の次に多かった。このことから、孫にとっては記憶力の低下も老いを感じさせる大きな要因であることが推察される。一方、石岡(2008a)や岡本(2000)の調査によると、家族は高齢者自身よりも記憶力の機能を高く評価する傾向にあり一致率が低かったことが報告されているが、本研究の結果では、記憶力の低下は孫の多くが認識していたことが示されている。

さらに、「心のエネルギーの低下」も、主に内面や内面の変化に伴う行動の変化についての大カテゴリーである。「性格の変化」では、優しくなった、穏やかになったなど【性格が丸くなった】という肯定的な変化に関する回答もあった一方で、老人特有とされる【頑固】など否定的な変化も見受けられた。また、祖父母が自らの加齢による能力の低下を実感していることが理由の可能性もあるが、弱気な発言や様子を見せることが多くなることも示されている。また、「性格の変化」によって「語り」の内容の変化も起こってくるのが考えられる。死を意識し、自分はもう長くないというような発言や自らの死後についての話をするが多くなるというような【死が近づく実感】があった。ひ孫を熱望したり、老後の面倒をみて欲しいなど、【今後についての要望】を表明することも多くなる。また、【昔の話】のように過去を振り返ったり懐かしむことが増えてくるのが挙げられた。「弱さの表出」では、実際の身体の変化を見てではなく、祖父母の【体の痛みの訴え】や【体調不良の訴え】を通して「老い」を実感するという興味深い結果が得られた。「関心の低下」では、こったご飯を作らなくなった、作る料理の品数が減ったという【食への関心の低下】、簡素な服しか着なくなった、身だしなみにあまり気を使わなくなったという【外見への関心の低下】があった。身体の老化に伴い、精神的な力や余裕が少なくなってきたことが考えられる。

(2) 祖父母の「老い」に対する孫の認知について

表2. 「老い」をどう思うかについての分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	数
洞察	自然視(60)	仕方がない(42)／自然なこと(12)／不可避である(6)	95
	思いを巡らせる(24)	辛さの想像(8)／自分もいずれこうなる(7)／「老い」についての考えの発展(5)／年月の経過の実感(4)	
	静観(11)	まだ元気(6)／気にしない(5)	
動揺	悲観(59)	悲しい(25)／寂しい(18)／死が近づいている実感(8)／切ない(3)／残念(3)／むなしさ(2)	90
	気に病む(15)	心配(10)／不安(5)	
	疎む気持ち(10)	不快感(5)／自分はそうなりたくない(5)	
	戸惑い(6)	驚異(3)／怖い(3)	
プラスのエネルギー	モチベーション(19)	助けになりたい(7)／残りの時間を一緒に楽しみたい(5)／大切にしたい(3)／安心させたい・喜ばせたい(2)／気づきたい(2)	31
	尊敬(6)	経験豊富であるということ(3)／上手に老いている(3)	
	好感(6)	よろこび(4)／悪いことではない(2)	
願い	健やかさへの願い(17)	元気でいてほしい(11)／残りの人生を楽しんでほしい(3)／無理をしないでほしい(3)	25
	長寿への願い(8)	長生きしてほしい(4)／若くいてほしい(4)	

次に、表2の「老い」をどう思うかについての分類については、《洞察》と《動揺》がともに多かった。《洞察》では、【仕方がない】【自然なこと】【不可避である】という＜自然視＞が多くみられた。これらは、吉田・田中(2005)が示した高齢者自身の「老い」に対する受容的な認知である「老い」の共通視と「老い」の自然視と一致すると考えられる。しかし、孫がこのような認知をしている場合も、祖父母が老化に適応するための効果的な認知となり得るのかについては明確ではない。また、＜思いを巡らせる＞というカテゴリーでは、生きているのが大変そう・苦しそう、老いていく自分に対してショックを受けているのではないか、自分では止めることの出来ない加齢に不本意さを感じているだろうなど【辛さの想像】がみられた。また、【「老い」についての考えの発展】は、肉体的な老いは人間の運命で精神的な老いは自分でなんとかするもの、若くみせようとするより年相応なのがちょうどよい、若いうちから体力や周囲のことに気をつけるべき、年相応とすることが老いの始まりなどの記述があったため、祖父母の姿から孫なりに老いていくことについて考えを深めていることが推察される。

しかし、大カテゴリー《動揺》では＜悲観＞も多かった。孫は祖父母の「老い」を実感しながら、【悲しさ】や【寂しさ】を感じていることが示されている。【むなしさ】では、自分にはどうすることもできない、何もしてあげられない、助けになれないなどの記述があり、無力感を感じていること

も予想される。また、「仕方ないけど悲しい」というような回答も多く見受けられ、孫が完全に気持ちに区切りがついているわけではないことが推察される。渡邊ら（2000）は、家族は高齢者の変化を「誰にでもある」と受け止め、高齢者の「情けない、つらい」という気持ちを理解しているとは言えない状況だったと述べている。本研究で多く見られた孫による〈自然視〉が、実際には高齢者にどのように影響するのかについては明確に言うことができない。また、家族は高齢者の姿から自身の老いについて考えていたと報告されているが（渡邊ら，2000）、本研究においても、特に〈思いを巡らせる〉と〈疎む気持ち〉で自己と関連させながら、自身の老いについて考えていることがうかがえる回答があった。〈思いを巡らせる〉は、祖父母の気持ちを想像して寄り添ったり、肯定的、中立的な関連のさせ方だった。一方で、〈疎む気持ち〉では、イラッとする、情けないなど、祖父母の老化または老化全般に対する不快感や距離をおきたいという気持ちが表れていた。〈戸惑い〉では、驚異や怖いという回答があり、孫にとって「老い」は未知のもので、漠然とした恐ろしさを感じていることが推測される。

一方で、モチベーションや願いなど肯定的な思いもみられた。大カテゴリーの《プラスのエネルギー》の〈好感〉では、性格が丸くなったなどの老化による肯定的な面や、親しく話ができる時間が増えた、頼ってくれるのはありがたい、共に生きているだけで幸せなどの回答があった。これらより、孫は祖父母の喪失的な変化である「老い」の中にもポジティブな面を見出していることがわかる。渡辺（2008）によると、孫は成長とともに、祖父母に面倒を見てもらう立場から、客観的にその存在を敬い、健康と長寿を願う立場へ移行していくという。本研究において、特に《プラスのエネルギー》と《願い》の大カテゴリーが得られたことより裏付けられるといえる。

### (3) 孫の祖父母の「老い」に対する反応・関わり方について

最後に、表3の「老い」に対する反応・関わり方についての分類においては、大カテゴリーになった《能動的よりそい》と《受動的よりそい》はどちらも心理的なサポートであると考えられる。サポートやよりそいには孫が積極的に関わっていくものと祖父母に合わせて受け止めるような受動的なものがあることが示された。

大カテゴリー《道具的サポート》の〈力になる〉では、老いを補う対策の提案、紙やホワイトボードに書いておく、マッサージをする、食事を作るなどの【実用的な助け】がみられた。また、孫単独で祖父母に働きかけるのではなく、家族のメンバーと一緒に手伝う、祖父母と同居しているきょうだいに気を回すように伝えるなど、【家族との連携】によって祖父母をサポートしている様子も見受けられた。〈相手に合わせる〉では、階段ではない方を使う、一緒に休むなどの【相手の行動に合わせて】、一緒に誘ってきたら応える、頼みをきくという【相手の要望に応える】が挙げられた。

《能動的よりそい》の〈心づかい〉で、孫はまだ若い、元気などと祖父母を【励ます】様子が見受けられた。また、「大丈夫?」「無理しないで」など【気づかうようなことを言う】こともある。さらに、それとなく伝える・教える、傷つけないように注意するなど、【気づかいながら指摘する】ことも示された。また、〈隔たりのなさ〉では、孫は積極的に祖父母に接近していることがうかがえた。

《受動的よりそい》の〈接するときの心がけ〉では、【あえて特別なことはしない】という回答があった。孫は、本人から頼まれるまで何もしない、普通に接するという気遣いをする、年寄扱いしすぎないようにする、お世話しすぎないなど、単にサポートをするのではなく、どのようなことがより祖父母のためになるのかを考えていることが推測される。また、笑って雰囲気明るくする、笑顔で接するようにするなどして、【笑顔を増やす】試みも行っている。話が通じなくても怒らない、きつ

い言い方をしない、責めないなどという【辛抱強く接する】という心がけもあった。さらに、《受動的よりそい》の中の〈包みこむ〉では孫の受容的な態度が見られた。年をとったということを否定しないで受け止めるなどの【受けとめる】、「大変だもんね」と共感するなどの【気持ちによりそう】という内容が見られた。加えて、〈元気づける〉では、「そんなことないよ」などと【老いを否定する】するなどが挙げられた。〈柔軟さ〉では、愚痴や昔の話をきく、同じ話をされてもきく、聞き手になる、話相手になるなどの【話につきあう】、無理と一緒に出かけようとしなない、無理に誘わない、自分のことは自分でやるようにするなど祖父母に【無理をさせない】ように関わっていることもうかがえた。

表3. 「老い」に対する反応・関わり方についての分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	数
道具的サポート	力になる(40)	手伝う(10)／実用的な助け(8)／手助けをする(7)／代わりにやる(6)／歩行の補助をする(5)／家族との連携(4)	68
	相手に合わせる(17)	歩くスピードを合わせる(10)／相手の行動に合わせる(5)／相手の要望に応える(2)	
	会話をするときの調節(11)	何度も話す(6)／大きな声で話す(5)	
能動的よりそい	心づかい(38)	励ます(18)／気づかうようなことを言う(12)／気づかうような行動をとる(6)／気づかいながら指摘する(2)	67
	隔たりのなさ(29)	意識せず接する(15)／会いに行くようにする(4)／会話の機会を増やす(4)／連絡を取るようにする(3)／近くに行くようにする(3)	
受動的よりそい	接するときの心がけ(21)	あえて特別なことはしない(8)／優しく接する(6)／笑顔を増やす(4)／辛抱強く接する(3)	62
	包みこむ(16)	受けとめる(13)／気持ちによりそう(3)	
	元気づける(14)	健康長寿への願いを伝える(7)／老いを否定する(7)	
	柔軟さ(11)	話につきあう(8)／無理をさせない(3)	
冷淡なふるまい	逃げ腰(24)	老いに触れないようにする(9)／ごまかす(5)／受け流す(4)／茶化す(4)／避ける(2)	41
	ざっくばらんに伝える(13)	はっきり指摘する(9)／仕方ないと言う(4)	
	強めにあたる(4)	怒る(2)／つれない態度(2)	

しかし一方で、《冷淡なふるまい》もみられた。〈逃げ腰〉では、笑ってごまかす、曖昧に答える、あいそ笑いをする、話題を反らす、適当に相槌を打つなど【ごまかす】、自分もそんな感じだ、私は若いから任せて、冗談っぽくあと30年生きてねと言うなど【茶化す】こともある。また、むやみやた

らに関わらないようにする、祖父母自体を【避ける】行為も見受けられた。〈ざつぱらんに伝える〉では、忘れていることなどを指摘、注意、納得出来ないことに反論するなど【はっきり指摘する】こともある。さらに、〈強めにあたる〉こともあり、「仕方ないでしょ」と強い口調になることで【怒る】気持ちを表現することや、接し方がわからず、そっけない態度をしたり、話し方がぶっきらぼうになるなどの【つれない態度】も見られた。このように、孫が祖父母に対する回避行動もみられ、どうしてよいかわからないという回答もあったことから、戸惑いから「冷淡なふるまい」につながっている可能性もあると考えられる。

以上より、孫が祖父母の老いを実感する状況や内容が、孫の祖父母に対する認知に影響していることが考えられる。たとえば、祖父母が耳が遠くなったことや記憶力の低下に気付くとき、祖父母を疎む気持ちにつながるリスクがあり、結果的に冷淡なふるまいという悪循環が生じてしまう可能性が考えられる。また、祖父母にどのように接していいかわからなくなって戸惑うことも冷淡なふるまいを引き出すことも推察される。一方で、祖父母の老いを感じた時に助けたいといったモチベーションが生起することで、祖父母に対して具体的なサポートを行い、状況によって能動的あるいは受動的によりそうといった肯定的な関わり方につながる事が考えられる。

## V. 臨床への示唆と今後の課題

孫の祖父母の「老い」に対する認知と行動は相互に影響し合っていると考えられる。「年をとったな」と感じることはコントロールできないが、祖父母自身の「老い」の認知や適応、精神的健康に否定的に影響するような悪循環を予防することはできるといえる。祖父母に対して冷淡なふるまいをするような悪循環の背景には、どう接していいかわからなくなるといった戸惑う気持ちがある。したがって、どのように祖父母に対応するのがよいのかについて祖父母や家族とコミュニケーションを通して理解することができると考えられる。そのように関わることによって、祖父母への認知も肯定的に変化することができるのではないかと推察される。

本研究は、祖父母と同居、別居、死別のすべてを含めた孫を対象とした。これまでの研究では主に同居家族を対象にしていたため、他の調査と比較検討をする必要がある。本研究の調査では、別居に特徴的であると考えられる回答がみられたため、その要因についてもさらなる検討を行う余地がある。さらに、祖父か祖母か、父方か母方かなどもによって、孫の祖父母の「老い」に対する認知や反応などが異なる可能性がある。今後、核家族化がますます加速していく中で、3世代同居家族だけでなく、離れて暮らす孫と祖父母の関わりについての研究の累積が求められるのではないかと考える。

### 【引用文献】

安達 正嗣 (2006) . 家族コミュニケーション研究の動向-最近の米国の業績を中心に-, 家族社会学研究, 18 (1), 40-45.

Erik H. Erikson, Joan M. Erikson, Helen Q. Kivnick (1986), *Vital Involvement in Old Age*, Norton.

(朝長 正徳・朝長 梨恵子 訳 (1997) ), 老年期-生き生きとしたかわりあい-, みすず書房.  
藤原 佳典・天野 秀紀・高林 幸司・熊谷 修・吉田 祐子・吉田 裕人・森 節子・渡辺 修一郎・森田 昌宏・永井 博子・新開 省二 (2003) . 地域在宅高齢者における認知機能低下者の生活機能の評価-本人と家族の評価における乖離の関連要因-, 日本老年医学会雑誌, 40 (5), 487-496.

- 橋本 翼 (2012) . 高齢者の心理的, 精神的健康状態における孫の及ぼす影響—孫—祖父母関係評価尺度を用いた検討—, 山形保健医療研究, 15, 21-32.
- 石岡 良子 (2008a) . 高齢者の心身機能に対する自己評価と他世代評価における年代差の検討, 生老病死の行動科学, 13, 25-32.
- 石岡 良子 (2008b) . 祖父母の心身機能の変化に対する家族の推定評価 祖父母の自己評価と家族による自己評価と推定評価の比較と祖父母の年齢に着目して, 日心第 72 回大会, 1201.
- Levy, R. Becca, Slade, D. Martin, Kunkel, R. Suzanne & Kasl, V. Stanislav (2002). Longevity Increased by Positive Self-Perceptions of Aging, *Journal of Personality and Social Psychology*, 83 (2), 261-270.
- 前原 武子・金城 育子・稲谷 ふみ枝 (2000) . 続柄の違う祖父母と孫の関係, 教育心理学研究, 48, 120-127.
- 中原 純 (2011) . 前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係, 心理学研究, 82 (2), 158-166.
- 西野 理子・米村 千代 (2019) . よくわかる家族社会学, ミネルヴァ書房.
- 岡本 和土 (2000) . 身体的および精神・心理的状态に関する高齢者と家族の回答の一致性に関する検討, 日本老年医学会雑誌, 37 (5), 371-376.
- 杉井 潤子・本村 汎 (1992) . 高齢者の主観的幸福感をめぐる—研究—家族システムの構造的要因との関連において—, 家族社会学研究, 4, 53-65.
- 田畑 治・星野 和実・佐藤 朗子・坪井 さとみ・橋本 剛・遠藤 英俊 (1996) . 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成, 心理学研究, 67 (5), 375-381.
- 内田 勇人・藤賀 彩花・江口 善章・西垣 利男・山本 存・矢野 真理 (2015) . 孫との関係が祖父母の精神的健康度に及ぼす影響, 日本世代間交流学会誌, 5 (1), 29-36.
- 村山 陽・山口 淳・山崎 幸子・藤原 佳典 (2018) . 高齢者における慢性型ストレスの特徴, *Journal of Health Psychology Research*, 31 (1), 21-30.
- 渡辺 由己 (2008) . 大学生の孫による、祖父母との関わりに関する研究, 吉備国際大学 社会福祉学部研究紀要, 13, 115-122.
- 渡邊 裕子・嶋田 えみ子・前田 志名子・内田 美樹・熊王 美佐子 (2000) . 高齢者の老性 自覚と老いに対する家族の意識, 山梨県立看護大学短期大学部紀要, 6 (1), 113-123.
- 村山 陽 (2009) . 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響, 社会心理学研究, 25 (1), 1-10.
- 柳澤 理子・馬場 雄司・伊藤 千代子・小林 文子・草川 好子・河合 富美子・山幡 信子・大平 光子 (2002) . 家族および家族外からのソーシャル・サポートと高齢者の心理的 QOL との関連, 日本公衛誌, 49 (8), 766-773.
- 吉田 薫・田中 共子 (2005) . 高齢者による「老い」の認知—その発生と適応に関する質的研究—, 健康心理学研究, 18 (1), 45-54.